

私がこの本と出会ったのは、大学二年生の冬の時である。私はその年の夏に母親を突然亡くし、「死」というものがあまりにも自分の近くに存在することを知った。愛する人がまた母と同じように突然いなくなってしまうのではないかという強い不安感を抱くとともに、生きる とは一体何なのだろうと真剣に考えていた頃だった。独特な物語の書き方の手法、その内容に惹きつけられ、一晩で読み切ってしまった。それから現在に至るまでも幾度も繰り返し読んでいるほどの大好きな作品がこの『私自身の見えない徴』である。

数学が得意な主人公のモナは、父親が原因不明の病気を患ったことをきっかけに、日常のいろいろな行為を「止めること」を始める。ピアノを弾くこと、地図帳を開きそこに描かれた国々を眺めること、そして彼女にとって一番の生きがいであった大好きな陸上さえも「止めて」しまう。「止めること」をやめなかったこと、それは自分を落ち着かせるために木をノックするという行為と日常の中に数字を発見するという行為だった。数学が得意で昔から街の間で有名だったモナは、恩師である先生に算数の教師になってみないかと誘われ、リサ、アン、ジョンなど個性豊かな子どもたちとのいるクラスに配属される。授業を通して子どもたちと交流をはかっていくうちに、リサの母親は癌で入院していて治らないかも知れないということ、そしてそんなリサのところに抱える闇の存在に気付いていく。

この物語では 生きる ことの不確かさ、不安定さというものが時には読むに苦しく、痛々しいほどに描かれている。モナの父親の病態は日ごとに悪化していく。モナが好きなことを「止め」始めたのは、そんな父親と一緒に暮らしながらも何も出来ない自分に対してやるせなさや深い哀しみを感じ、自然に自己否定をし始めてしまったからだと思われる。しかし一方で彼女はそんな自分に気付いて欲しいという想いを常に抱いていた。どう見ても顔色の悪い父親に対し気を遣ってモナの一家に何も声をかけてこない近所の人々、何より父親の病気で暗くなってしまった家の中、そんな状況下に置かれたモナは、あまりに堂々とそして真っ直ぐに自分の気持ちを伝えることのできるリサが「妬ましい」「くらいに羨ましかったのだ。複雑に入り交ざった想いを口に出せない代わりに吐き出すかのようにモナは、木や木製の机、壁、それらに向かって必死にノックし続ける。「止めること」ができたかったその癖は、世界の誰にも気付かれていないものだ。彼女は確信していた。そして好きだったことを自分から切り離してしまうことこそが、彼女にとって周りに向けることのできる唯一のメッセージだったのかも知れない。

辛い気持ちを吐き出せないモナは、常に自らを孤独であると感じていた。しかし純粹ゆえに自らに真正面からぶつかってくるリサや他の子どもたち、近所に住む金物屋のジョーンズさんと触れ合っていくうちにモナは周りの人間の素直さ、不器用さ、いろんな面に気付きながら次第に成長していく。「私はいつもこっさりノックしているつもりだったのに。私自身の、うしろめたい、個人的なギロチンとして。」しかし子どもたちはちゃんとモナを

見ていた。必死に訴えかけるようにノックし続けるモナをしっかりと見ていたのだった。そのことを知ったモナの世界は、全てが「色褪せて」いたものの、徐々に色彩を取り戻していく。

モナの十歳の誕生日に、まだ元気だった父親が彼女に話して聞かせたという短い「お話」がこの物語の冒頭である。永遠に生きることのできる体を持つ人々が暮らす国で、人口が増えすぎたため王様が国民に向かって「家族のなかから誰かひとり捧げなさい」と命令する。ある一家はそんなことは出来ないといい、体の一部分だけを家族がそれぞれ差し出すことで譲歩してもらおうというお話である。モナは、リサにその「お話」の最後の結末だけを変えて「お話」を聞かせてあげる。モナの「お話」では家族の中で唯一娘だけは永遠の命を捨ててもいいから隣町に引越すと宣言するのだった。隣町に向かって歩いていく娘。「隣町で待つてるからね」と娘は言い、家族を含めたたくさんの人々に見送られながら彼女は隣町に続く黄色い丘を歩いていく。

モナが父親から聞いた「お話」の結末を変えたことから、モナのこころの再生、生きる希望の表れが見受けられる。リサに聞かせようとする直前、モナはそれまでノックばかりしていた「木」に向かってこう語りかける。

私がいま話していることを聞いて。しるしをつけておいて。気づいて。

おそらく、モナがそれまで「木」に向かって無言の悲痛な叫びを刻み付けていたのと一転して初めてこのように語りかけたのであろう。リサに「お話」をした場面でこの物語は終わるのだが、その後のモナの新たな出発、希望に溢れた気持ちとその創りかえられた「お話」から見出すことができる。

私はこの本を初めて読んだのが母親を亡くした直後だったということもあり、この物語から登場人物の不安感、人間の 生きる ことの難しさを感じ取り、胸がつまる想いだっただ。しかし、今でも何度も何度も読み返しているのは、その中に前向きな生き方を発見することが出来るからだ。迷い、悩み、何かにくじけそうになってしまった時に、私に希望の光を与えてくれるのはこの『私自身の見えない微笑』である。きっとまだまだ私のなかにも見えない 微笑 が存在するのだろう。それを、たくさん事を経験しながらゆっくと、気付いていきたいと強く思う。